

## 編集・出版と参加者データベース コンピュータをいかに利用したか

重田眞義

### 論文集・要旨集の簡易 DTP 編集／出版について

別稿でも述べられているように、京都大会の論文集は、大会開催前に集めた発表予定原稿を編集し、書籍として刊行したものを大会初日には参加者に配布するという方法をとった。結果として、ほぼすべての論文を掲載した3分冊の論文集と、提出されたすべての要旨を掲載した要旨集を期日に間に合わせて完成することができたが、作業の過程を振り返ってみて、反省すべき点もいくつかある。以下に編集の準備と作業の過程をおって、要点と問題点を記しておきたい。今後、同様の試みをされる場合の参考になれば幸いである。

#### (1) テキストのデジタル化とファイル形式の統一

執筆要項では、論文を紙にプリントしたものと同時に、テキストファイルあるいは、市販のワードプロセッサで編集したファイルをソフトウェア名を記したうえで送るように求めている。電子媒体で投稿する場合は締切を2ヵ月遅く設定していた。事故を心配して論文の電子メールによる投稿は原則として受け付けないことにしていたが、実際には15人が添付書類や電子メールの本文にして論文を送ってきた。その結果、165本の投稿のうち、電子媒体を添付しなかったものはわずか13本であった。これらの論文については、10本はスキャナーで読み取って解析することでデジタル化した。3本はタイプライターで打たれていたため読み取りがうまくいかず、手入力をおこなった。これにくらべて、電子メールの利用を認めていた要旨は、半分以上が電子メールで提出されたため、変換の手間が省けた。

編集にとりかかる前の最も大きな問題は、様々なワープロのそれも異なるバージョンのファイルをひとつひとつ変換して統一していく作業にあった。アフリカセンターの設備を利用して作業をする都合上、最終的な編集作業を Macintosh で行うことはす

ぐに決まったが、ソフトウェアに関しては、当初は DTP 専用のソフトを使用することも考えていた（ミシガンでは PageMaker が使われていた）。結局、専用ソフトでは作業に熟練した人を確保できないこと、通常のワープロソフトでも十分に出版に耐える仕上がりが期待できることを理由に、マイクロソフト社の Word Ver.6（Mac 日本語版）を使って編集作業をすすめることに決めた。

送られてきたフロッピーディスク 130 余枚（5 インチのものが 3 枚あった！）のうち、まったく変換できなかったものは日本で入手不可能なワープロソフトを使用していた 1 枚だけであった。MS/DOS および Windows 上のソフトを利用した投稿が全体の約 6 割で、予想したよりも少なかった。また、Windows のソフトで WordPerfect を利用したファイルが容易に Mac 版 Word で読み込めたことも変換作業をおこなううえで幸運なことであった。ちなみに自動判別システムによって未然に駆除できたウイルスを含んだファイルは 3 本あったが、すべて MS/DOS フォーマットのファイルで、Macintosh フォーマットのディスクでは発見されなかった。

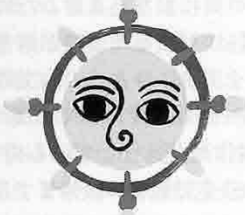
送られてきたフロッピーディスクはまずコピーをとり、それを Mac 版 Word Ver.6 で読み込める形に変換し、2 枚のフロッピーディスクに保存して、1 枚は予備として保存し、もう一枚を編集作業に用いた。作業に使用した 3.5 インチフロッピーディスクはおよそ 600 枚である。

#### (2) フォントの問題

ファイル変換よりも、さらに頭を悩まされたのはフォントの問題であった。最終的に、発音記号、アムハラ／ゲエズ文字、アラビア文字、その他アフリカの諸言語の表記に用いられる特殊なフォントなどをそろえた。幸い、必要な Macintosh 用のフォントがすべて米国で販売されており、インターネット上で注文をすると国際宅配便ですぐに入手できた。こ

ETHIOPIA  
IN  
BROADER PERSPECTIVE

Edited by  
Katsuyoshi FUKU  
Eisai KURAMOTO  
Masayoshi SHIGETA



Volume I

PAPERS OF THE XIIIth INTERNATIONAL CONFERENCE  
OF ETHIOPIAN STUDIES

[写真] *Ethiopia in Broader Perspective, vol. 1* 表紙。

これらのフォントは日本語システムの Mac にも簡単にインストールして使用できた。

編集作業上では、変換の際に化けてしまった一部の特殊文字フォントを原稿通りに置き換えていかなければならなかった。特に言語学関連の論文では特殊フォントが多用されており入力作業は困難を究めた。この作業は縄田浩志さんが一手に引き受けてくれた。

### (3) 使用した機器、ソフトウェアなど

編集に使用したコンピュータはアフリカセンターに設置されていた Macintosh7 台（すべて Power Macintosh、うち PowerBook2 台）である。最終版のファイルの保存と印刷には、新規に購入した別のコンピュータを用いた（このコンピュータはメールの着信と後述するデータベース作成にも用いた）。また、ファイル変換のために、DOS/V コンピュータ (Windows95) 1 台を新たに用意した。またウイルスチェックには別の DOS/V ノートパソコンを当てた。このほかにも、作業に携わった人達の個人所有のコ

ンピュータが多数使用された。編集作業を終えるまでに、故障したり潰れてしまった機器は、モニタが2台、本体が2台であった。ここぞというときに限ってコンピュータは不調になったり壊れたりする。Macおなじみの爆弾マークが頻発して、作業中に悲鳴をあげることもよくあった。システムのメンテナンスや不具合の調整にはアフリカセンターの福井慶則さんをしばしばわずらわせた。プリンタは新品のレーザプリンタ1台を用意したがわずか4ヵ月でドラムの寿命が尽きた。プリントとコピーに要した紙は A4 判約 13,000 枚である。その反故紙は1年を経たいまでもセンターで裏面を利用している。

Mac 日本語版 Word Ver.6 以外に使用したソフトウェアは、以下の通り：

WordPerfect (Win 日本語版 ver.7 & Mac 英語版 ver.5); Nisus Writer (Mac 日本語版); MS Word Ver.5 (Mac 英語版); MS Word Ver.7 (Win 日本語版); eTypist97 (Mac 日本語版)。

### (4) 版下の作成と図表の扱い

今回の論文集の編集方法を簡易 DTP と呼んでいるのは、すべての編集をコンピュータ上でおこなったわけではないからである。特に、図や写真の扱いは素人が普通のワープロで版下を作る場合、技術的にも設備的にも難しい。高精度のスキナーとプリンタを導入する経費に見合うだけのよい仕上がりになる保証もない。中西印刷の中西秀彦専務のアドバイスもあって、図と写真は原図を原稿に手作業で貼りこんでいく方法を用いた。一見、原始的に見えるが、縮小率を変えながらレイアウトを紙の上でかんがえていくので難しい操作をしなくても満足のいく仕上がりを予測することができる。微妙な間隔の調整も可能である。この作業は、新畑宙子さんが英文雑誌編集の経験を生かして美しく仕上げてくれた。

図や写真とちがって、表はその取扱に苦慮した。送られてきたファイルの中に完成した表が埋め込まれていたり、執筆要項の要求通り別ファイルで送られてきたものはごくわずかで、手書きのものまであって大半の表はこちらで作直した。編集作業のかなりの時間が表の作成に費やされたといっても過言ではない。しかし、作業も佳境に入ってくると、ワープロの表作成機能を自在に利用して原稿よりも

はるかにみやすくてきれいな表をしあげることもできるようになった。

#### (5) スタイルの統一と作業の習熟

編集の作業に従事してくれた人達は、それまで、特にDTPの経験があるわけではなく、使用したワープロソフトについてもその機能を十分に知っているというわけではなかった。編集の作業は、(1)英文の校閲を反映させる作業（英文直し）と、(2)印刷原稿としての体裁を整える作業（整形）に分けた。ワープロの機能に習熟していないひとは英文直しだけをまずおこないながら、操作になれていった。整形作業では、ワードの機能としてあるテンプレートとスタイル機能を使って、半自動的にマージンやフォントサイズを決め、それにしたがって表題、本文、見出し、注、引用文献などを一定の形に整えていくことができる。ワードをかなり使いこなしている人でもこの機能まで利用している人は少ないので、簡単な講習を最初におこなった。厳しい時間的制約のなかで編集作業が締め切りに間に合った理由のひとつは、後半になって作業の効率が非常に上昇したことにあるだろう。多くの人が比較的簡単な作業に慣れた上で、さらに表の作成などのやや高度な作業もこなすことができるようになった。

#### (6) 編集作業全体の流れ

編集作業全体の流れをまとめてみると、以下のようになる。

- 1) 送付されてきた原稿のコピー、ファイルの変換
- 2) 校閲者による原稿の検討、修正（初稿校正）
- 3) 原稿の修正と整形
- 4) 校閲者による再検討（再校）
- 5) 最終的な印刷体裁への整形
- 6) プリント（念校）
- 7) 図、写真の貼り込み、
- 8) 目次の作成、ページ数の決定
- 9) 印刷会社へ

1)と2)の過程は紙の上でおこなわれた。最初からDTPに持ち込むという方法も検討したが、原稿に赤を入れていくという伝統的な方法がよいと判断した。複数の校閲者が同じ原稿を検討したり、コメントを書き加えたりするのに紙媒体は最も適

している。変更前の状態がすぐに参照できる点でもすぐれている。ミシガンではコンピュータ上で校閲をおこなったために生じたと考えられる単純なエラーが散見されたが、今回の論文集では最小限に押さえることができた。

3)以降の過程はコンピュータ上でおこなわれたが、再校、念校ともにいったん紙にプリントしたものをを用いた。これによってモニターの画面上では気づかないミスも修正することができた。

図、写真の貼り込みは完全に手作業でおこなった。本文の行の間に割り込ませるための縮小の比率と行数の計算は、型紙を何種類か用意しておこなった。当然のことだが、ひとつの論文の枚数が変わると、全体のページ数が変わってしまう。同時に多数の論文の編集作業が進行しているので、目次の作成とページ数の決定は最後の段階まで手をつけることができなかった。

版下となる最終原稿は、600dpiのレーザープリンターで出力し、ページ番号を鉛筆で記入したうえで3巻分の目次をそえて中西印刷にわたした。原稿はA4判で、完成サイズは87%のB5判に縮小された。ヘッダーとページ番号は中西印刷でいれてもらった。

印刷会社にとってはたいへんな迷惑だったと思うが、最終原稿をわたしたあとで、印刷直前のいわゆる青焼き（ブループリント）の段階で再度校正をさせてもらった。ここでもかなりの数の単純な間違いを直すことができた。

#### (7) 成功の秘訣：印刷会社との連携、時間との戦い、達成感

実質3ヶ月余りの期間で2,000ページを越える論文集を自前で版下をつくって印刷に持ち込むというのは、無謀であると忠告してくれたのは中西印刷の中西秀彦専務であった。すべてを印刷会社へお願いすると、1年以上の時間と3倍以上の費用が必要であった。しかし、経費の制約はどのようなもなく、また、大会初日に間に合わせるという点も決めた以上どうしても実現したかった。

最終的に、当初の目標をほぼ予定通り達成できたことは様々な要因によるといえる。それにはまず作業に従事した人たちの献身的努力、周囲の人たちの支援、いくつかの幸運、そして印刷会社との連携をあげることができるだろう。特に中西印刷は、私た

ちの決して周到とはいえない準備状況を心配して、1年以上前から親身になって様々な相談ののってくれた。印刷屋としては全くもうけにつながらないことについても快く応じてくれた。版下の編集にワードを用いること、字体と版型の選択、見本版の作成、特殊フォント探し、図の貼り込み方法など編集作業上たいへん重要な決定事項に関してそれぞれの段階で適切なアドバイスをうけた。もちろん、ファイルの変換や製本強度のテストなどプロフェッショナルな仕事も迅速に対応してくれた。

振り返ってみると、編集作業は何よりも時間との戦いであった。中西印刷は印刷会社の必要とする時間を極限まで短縮して、こちらの時間をふやしてくれた。私たちは睡眠時間をけずって作業にあてた。成功の最大の秘訣はと問われて簡単に答えることはできないが、もし、その場の雰囲気伝えることができるなら、徹夜の作業を終えたときの高揚した気分と、お金や名誉では評価できないものを得たようなある種の達成感を編集に関わったひとたちが共有できたことにあるのではないかと思う。

#### 参加申込者に関するデータベースの作成

本大会の参加者は、同伴者や当日参加の人たちを含めると二百数十人にのぼる。第一回の案内状は、前回のミシガン大会から引き継いだ名簿に、日本国内の関係者、諸機関を加えた約1,500件の宛先に発送された。それに対して事務局に寄せられた参加申込（郵便、ファックス、電子メールなど）は、最終

的には参加しなかった人も含めると410件に達した。これらの参加希望者に関する諸々のデータはすべて一元化してデータベースにまとめた。

電子メールを受信するコンピュータ上でデータベースを作成して、論文タイトル、参加の確認、宿泊・エクスカーションの申し込みなどの様々なデータを再入力する手間を省いた。また、要旨の大半が電子メールで送られてきたので、データベースと連携させて編集をおこなった。論文タイトルと氏名・所属を再入力することなくセッションの発表組み合わせを変更できるようにして大会プログラムの作成にも役立てた。

データベースのソフトウェアは、日本語版Mac上でファイルメーカー Ver.3を使用した。基本データ入力の作業はすべて重田研究室に設置したコンピュータを用いて豊泉富士美さんがやってくれた。データベースの構造は実行委員会で相談しながら重田が作成していった。

データベースは、氏名、所属、連絡先などを記したマスターファイルと、それにリレーションをつけた4つのファイル（宿泊、論文、エクスカーション、プログラム）から構成されている。データベースの体裁は見栄えのするものではないが、少し手を加えれば他の同様の催しにも利用できると思われる。ご希望の方は御連絡下さい。

（しげた まさよし 実行委員会事務局  
京都大学アフリカ地域研究資料センター）